

歳を重ねるということ

田中拓也

私が敬愛する歌人の一人に上田三四二（一九二三～一九八九）がいる。その著書『短歌一生』（講談社学術文庫）の中に次のような一節がある。

短歌が青春の文学であることを私は首肯するが、よりいっそう、老年の文学であることを確信する。

もちろん、これは短歌が「青春の文学」か「老年の文学」かという二者択一の問題ではない。世阿弥の『風姿花伝』における「時分の花」「まことの花」を持ち出すまでもなく、それぞれの輝きがあるということであろう。昨秋、刊行された伊藤一彦の第十六歌集『言霊の風』（角川書店）と小池光の第十一歌集『サーベルと燕』（砂子屋書房）はともに「老年の文学」としての短歌の魅力を感じさせる作品世界が広がっている。

・人の世を映さぬ天上おもひつつ元旦の酒しづかに捧ぐ

伊藤
一彦

・四十歳になりたるわが娘と凧揚げす元日の空に凧あがりたり

小池
光

両歌集の巻頭歌はともに正月の歌。「人の世」とは異なる「天上」への想いを詠んだ伊藤の作品はまさに「ハレ」の歌と言えるだろう。それに對して、小池の作品は「四十歳」になつた「わが娘」

と「凧揚げ」をするという正月の一コマを詠んだ「ヶ」の歌と言えるだろう。二人の作品を読み続けている読者の一人として、両歌集の作品を読みつつ感じるのは歳を重ねるということの奥深さである。

・ことごとくわがつぶやきの聞かれをり遺影の父と遺影の母に

・「人生はこれから」がつねに口癖の父のこれからをつひに知り得ず

伊藤
一彦

・骨壺にはんぶんもなき母の骨 骨の一片まで生き抜きたりし

小池
光

両歌集より父母の死を詠んだ作品を抄出した。二人の作品は挽歌も色合いが異なる。言葉や精神に焦点をあてる伊藤、時間や物質に焦点をあてる小池。そこにはそれぞれの作歌観が反映されている。

・鳥渡りくるこの空と思ひつつ点す目薬のひえびえとあり

伊藤
一彦

・生命保険解約をしてすがすがとわれは居るなり死ぬときは死ぬ

小池
光

「老い」をどのように受け止め、何を詠むのか。二人の作品はそんなことを深く考えさせてくれる。「目薬」の冷たさを通して生の実感を詠む伊藤。「生命保険解約」を通して、死の実感を詠む小池。こうして読み比べてみるとスリリングでさえある。伊藤一彦と小池光という二人の歌人の「老年の文学」の激しさは「青春の文学」に負けない光彩を放つている。